

繪本通俗三國志

三編

122
71

東 京 圖 書 館

和書門

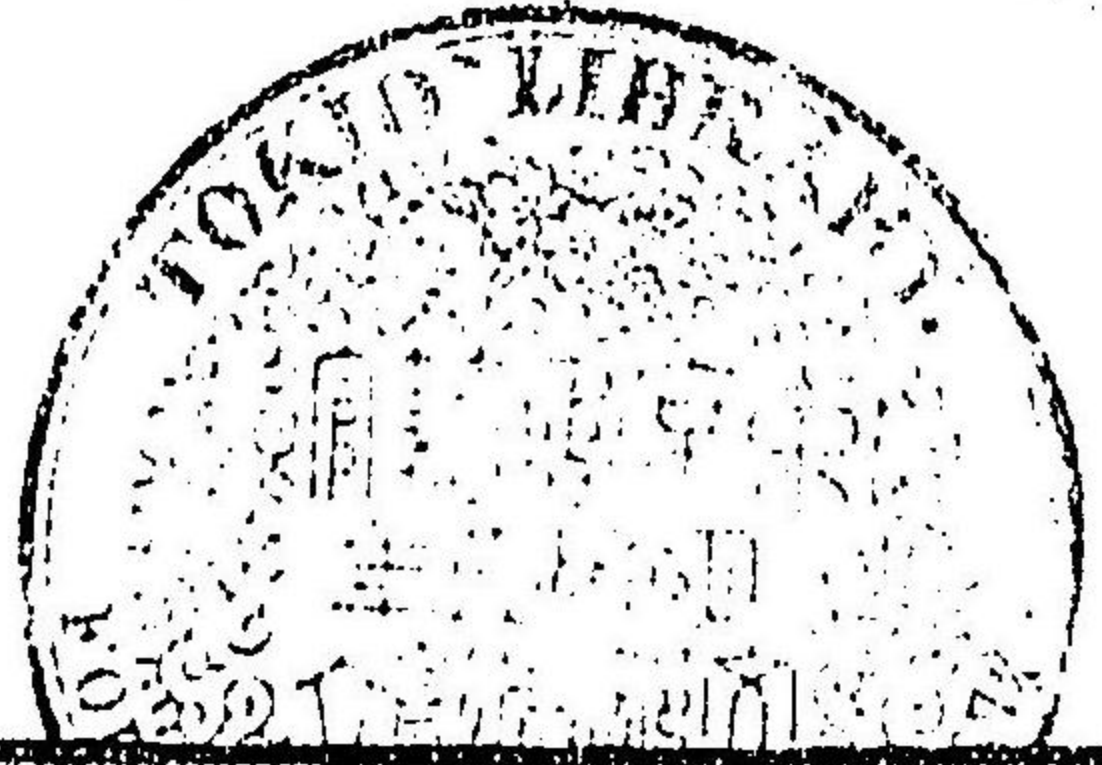
小說類

二六函

二六架

七八號

七五册



繪本通俗三國志三編卷之八

目錄明治十年交換

孔明計燒新野城

玄德敗走江陵

長阪坡趙雲救幼主

繪本通俗三國志三編卷之八

〇

降泰の書を獻じ某の使ありといひまは。関羽大驚
 き宋忠とて入る新野より。その趣きと詰る。玄德
 のへき。涙とあがりて昏絶。張飛も生事。起りて
 攻取劉琮と討殺。こま入といひ。相計らんとて。劍を
 忠よむ。諸人ある企あらば。汝あんどを。あらざる
 汝が首を刎らうとも。怒り解ぐ。汝をかく。回る。い
 こま入を。宋忠が。城外の人は。殺さん。玄德は
 曰く。汝が者。命を背。あらん。宋忠頭を刎へ。鼠の
 入を。宋忠頭を刎へ。鼠の。去らる。玄德は。憂悶

へく居。夏。劉琦より使あり。伊籍といふ者
 きた。前日の恩を謝し。伊籍曰く。頃日劉表とて
 世に。蔡夫人蔡瑁と計。のせ。隠して。變
 と報せ。人の入と遣はす。實不。いひ。と
 て。劉琮と国主と。君の。入。もあらん。と
 某の使。哀書。た。玄德。い。と
 その書。曰く

孤子劉琦謹獻哀書上達于叔父大人座前近聞
 先君薨于荆乃以繼母與蔡瑁張允二人商謀不即報
 喪矯立弟劉琮為九郡之主大亂綱常實難容



割封

許褚
西山の
旗を怪
先手と報



麻芳

許褚

二色の旗を、入すべしと陣を取らば敵の勢
 来りあはば麻葉芳の紅の旗とさしたる千余騎と左よそあへまこ
 劉封の青き旗とさしたる千余騎と右よそあへ敷正と一と
 ひえあはば敵のふらたぐふとさしたるあらざむ進まばそのと見四方
 破りそのちせらぐ白河と来るべしといひひまはば二人計せりけ
 て出まらり孔明手分せりといひてりりまはば玄德とよる高き山
 のおのて軍のちりて見物とさして曹操の死城とありて曹
 仁曹洪と大将と一十方の勢と先陣と一と新野城とむら
 へむ許褚の折衝將軍とありて三千余騎の精兵と率
 鉄の甲と一やうの色とばまると先陣よりさやふとさしるみ千の刺

二、鵲尾坡といふ。案内者せりて。まきより新野まで道程の
 ちりて問を三十里ありとありて許褚すおちて十騎を遣
 へて行先せりてさしる。その回り。まきよりさやふ山と依山領と
 敵陣と取り青き旗と紅の旗と打混と。勢の多少のへむわら
 へりて許褚と取らば三千余騎と引と一奇と打向へば劉封
 麻葉芳二色の旗とさしと両方へ引分隊伍とみとさす。整と
 許褚問と曰く。あはれも人々蒐りるべし。許褚が曰く。行先とあら
 ば伏兵とあらん。汝はさしとさしりて動りあらざむ。二人引
 して先手の大将とさしとさしりて馬とさしと曹仁と見へ
 敵のせむと告りて曹仁と曰く。古より兵法。有虚有実の

追人來り。西北南の三方より火をさしつと報せり。
俄に城中見ゆの沸がどくひあがり。曹仁曹洪膽を以
て。甲よ刀よとて馬のりりる。四方八百火をあひ紅
天を焦す火の中畑の中ももる。逃路の何ぞとて走りま
かりり。東の門の火あくと呼りり。幾千もの兵士と十萬
の大軍ひよりの門より出んと。推あひあひ。たがひ手足を
踏抗られ。死せざるもの幾千もの兵士と。幾千もの兵士と。
さよとる曹仁ホ宗徒のどの恙あへ逃れ生さる。とて走り
り。忽ち喊をばり。趙雲一軍を引く追討させむ。曹仁
幸に命を逃延る。又鼓を打。糜芳一軍路をささる。
列色んぞ揉んぞ。曹仁とて討せんとく。走り。

又劉封が二軍つたり。討せんと生さる。とて走り。夜の四
更のたひ。人も疲馬も弱。兵士の残り。兵士の頭を
集。額を爛ら。たのあ。白河の辺。あ
あ。水で飲馬の水。とて乱行。また鳴。さ
だ。関羽の孫。河上居。新野。火の。ち。
時刻ありぬと待。河下。人馬を。さ。
さ。時分よ。とて。一度。塞止。水。切。
水勢。曹仁。人馬。死。の。
さ。その内曹仁。水。の。河。の。博。
の。近。忽ち喊。と。一。敵軍路。取。
切。真先。と。大将。張飛。雷。の。落。と。曹

仁が勢を追究蘇おまきとと探たりの血あがまを白泉の
どく屍のよまたたの麻やまがせるぶと。大将曹仁はさや危
らへ入ると許褚一人のりて入くと張飛と鎗をのせ十合争
りて一と路をうづめて逃去ぬ張飛兵を収めと。玄徳孔明
と一手あり。江を志とつて来りぬ。劉封糜芳舟をてる
へて待居たり。諸軍とつて渡りぬ。孔明その舟を焼益
したるは樊城へ入る。

玄徳敗走江陵

曹仁曹洪辛基命と逃すと新野城の焼跡を陣と取曹洪
一人宛城へ行敗軍のゆき告りぬ。曹操大に怒り。魏王
夫をよとつてこのとてある。大軍をゆき一奇を新野へ推寄

野は満山と漫と陣と取の云と一手は分一手は山路を進一手は白河
と填めと樊城を踏破せん。とつて打立けり。とれた劉琰
はつてへ丞相をたつて。そのも入来りのゆき民の心は懐か
民の心懐かぬ。小勢ありと守り。今玄徳新野の民を
樊城に移し置味方の大軍一度は蒐らば新野は樊城に
料あがると。百姓と殺す。丞相はさるとのまはんとく。
まの人は遣い。玄徳はまはると降泰せしむ。玄徳は
とい降すと。丞相の心百姓とあはれと。人の心は
く徳と感せむ。一玄徳降りあはれ。荆及戦をどし。御手
よへべ。そのち荆襄の兵を起し。呉の孫權を破りた
つて。天下一統あり。曹操は白く。その計大に好し。



三國志三卷第六
九

のく使とせし劉曄が曰く徐庶もとす。玄德と交りて
 くまひの命とす。曹操が曰く徐庶を遣はさば再び
 えらば劉曄が曰く徐庶は「うへに天下の人を笑は
 んまはるも疑は遣はす。曹操が曰く徐庶とて生
 りて本樊城に詣りてとわらひて。百姓を
 害せんとして畏る。汝行くと玄德とて甲と脱と降ら
 ば。今もこの罪を免くと官爵とあて給へ。は又
 よひて。汝が忠誠あるとある。この人疑は遣はす。
 常の汝が忠誠あるとある。この人疑は遣はす。
 といふ。徐庶命と受て樊城に行き玄德孔明と
 合はる。昔の情と物類と。徐庶の某とて

来らむ。曹操が奸計假ひ民の心を懐かた。某
 は「回らずんば万人の笑とあらんと。胸とて某
 もと將軍と。王霸の基業を因らんとせし。この方寸と
 てある。今老母死すと事と益ある。生のあひて人のため
 一の計とある。君の母龍あり。大業の成む。患
 めの曹操大軍と八手と分白河と填へて攻来る。
 君とて避る。相別とて回りル。玄德孔明と
 ひらいて。問ひ入る。孔明が曰く。樊城を
 打棄襄陽の百姓と拒る。外と計あり。玄德
 の曰く。百姓の百姓と志た。この百姓の由と告

と引て江陵より生合へしといひの人を関羽命と受て生るなり。そのうち張飛と後陣として。趙雲は妻子老少を守護させ。十余万の百姓を引具し一日より十里ありて打て江陵とさして洛陽の令を以て襄陽城に文聘魏延が戦ひて死す。そのの板万人屍の壘として。屠所の肉は異あらず。その時曹操はさして樊城に大軍を屯し。劉琮を召して對面せしとて使を遣し。劉琮は怖まて行ひてもいせむ。たゞ蔡瑁張允二人のそ行くと請ひまて劉琮をあち文聘とそへ遣り。と死す主威といふものひそる告ぐ。曹操は將軍の降めし。玄德とて走めし。さうしてさうして備はし。孫がく將軍數千の兵とて。險阻を據り討めし。曹操は

く破るべし。も曹操は破りあつて天下を震ひ中原を虎視して。廣く其の機文を馳せ定むべし。あま遇がなきの時あり。夫れべららまといひまて劉琮の由て蔡瑁は熟る。蔡瑁大に怒り。王威天命順逆の理をささきあふとて無用の舌を動かさすといひまて王威をあげ。国を賣員の賊とま。汝が肉を生おがら喫さるる恨むと。討りまて蔡瑁いよく怒り。斬まるといひまて。荆越いさめまて免すと。蔡瑁張允と打はま。樊城を行く。曹操を見へ地を再拜して。辞色をたもて。紹はあり。曹操問て曰く。いま荆及びの軍馬。餼糧をの板いつわらある。又誰人の管領ま。蔡瑁が曰く。騎兵五万歩卒十五万。水軍八万。都合二十八万人。金銀兵糧

王粲傳異て関内侯の封下劉琮と青及の刺史封
 下早く旅行の用意をあしめて青及へ行へしむ劉琮を
 携り某官爵の望あしむる程がくあまの國の留りて父
 母の故國を守なくひて哭たりまを曹操が白く青及の都
 ちうたふあまの汝で朝廷まをまを。官人とおまはしむる
 あまのまをのあまの人は害せらるるのひあかんすまをま行へし
 使しるまを劉琮の方あり。蔡夫人と泣く住馴る國を
 えるれ青及へてと出るるがひのり変り果る。相伴人もあ
 たる曰き大將の王威のりまをのまをり從ひる。曹操ひまを
 千禁とまを。汝五百余騎まを劉琮と追蒐途まを一人も
 あままを斬奔る。後の患と絶へしむるまを。千禁まを

了。劉琮の命と受汝ホと謀まをまをの兵と下知り討くられ
 毛蔡夫人劉琮といひて汝号まを主の行末と見届けんと
 かく一人まをのまをまを王威力とまを。近寄敵と走蒐り
 火とまをと戦ひるる。卒と大勢の國と討死しる。劉
 琮が一類一人のまをまを。運の末と哀れまを
 長坂坡趙雲救幼主

荆及事をく手まを入るる。曹操深く孔明と悪んが隆中へ
 人て遣し。孔明の妻子とまをへんとあまを。搜し。孫権まを
 孔明の孔明元来三江の中。應置し。まを。あまを。回
 る。曹操の怒と令と。玄徳逃去と。十日のまを。まを。荆



張飛



張飛勢
一騎敵軍
臨

新編通鑑三國志三卷之八

及と治めり。日とてさるる。荀攸の言を以て曰く。此の路を
 畏れし路を以て。江陵城の荆及び第一の要害。金銀兵糧乃
 用意澤山あり。玄德は「此の城は龍あり。さうしてさうして落
 うとす。あまよく早く追ぬれば。曹操奮然とて曰く。汝を
 せむとす。大將を以て。文聘一人を遣はして。追ひて。用
 召るる。文聘は。生見ゆ。曹操問て曰く。汝は。誰とす。澤
 る。文聘曰く。某は。劉表を輔く。國家を安んずる。と
 なむ。劉表は。逃去して。入る。常。漢川を守り。境を
 め。生と。孤弱と。死と。黄泉の下に。思ふ。真
 んと。計。遂。げ。巴。の。得。真

は哀を愧へきあり。おんの面目ありて。人より先。生
 涙とあがりて。曹操そのんで感。真。忠臣ありとて。
 江夏の太守。関内侯。封。兵。付。案内者。又問
 て曰く。某。落去。途。行。人。の。の。答
 て曰く。某。の。玄德。十。万。の。百姓。と。入。て
 一日。の。十里。の。路。行。と。の。の。三。百。里。の。
 曹操。大。勢。の中。の。精。兵。五。千。と。え。び。せ。し。
 一日。の。内。の。玄德。追。付。べ。大。軍。の。後。の。の。み
 来。五。十。の。兵。の。好。馬。と。え。ら。ん。ど。實。よ。き。鎧。と。り。さ。祿。よ。文
 聘。の。案。内。者。と。し。馬。と。飛。し。途。の。教。よ。思。る
 もの。の。首。と。刎。ん。と。し。馬。と。生。せ。ば。五。千。の。鉄。騎。の。

勢ハ風火どく。操ハ操ぞ追誼より。そのとら玄徳ハ十萬
 余の百姓と引具し。江陵城へと志し。其の二千余騎
 兵と率し。趙雲ハ妻子とまのらせ。張飛と後陣とし。と
 落ゆ。孔明が曰く。さだハ関羽と江復へ遣し。とす。孔明
 音信あつた。いさあるも人ぞ。玄徳の曰く。軍師孫がく。孔明
 行と救と請ゆ。劉琦また軍師の教す。引具。孫母乃
 難と逃し。軍師行ゆ。あらむ。孔明
 あり。辞せむ。劉封と五百の兵と引具し。江復とさし。と
 せ。その日。玄徳ハ簡雍。糜竺。糜芳と。馬
 ぞ。え。ち。ゆ。ゆ。忽ち一陣の狂風。馬の前より吹起り。塵埃
 天と掩ひ。日の光も見え。と。い。び。く。も。あ。く。喚。き。号。ぶ。声。

遙々まきまの。玄徳大ハ馳まの。簡雍とより。陰陽ま。わ。た
 あり。ま。ま。袖の中。ま。占。く。や。ひ。る。ま。大。内。の。兆。あり。此。應
 今。ま。の。り。君。ま。く。百姓と打奔。途。が。い。そ。ひ。で。逃。ま。の。人。玄。徳
 の。曰。く。ま。新。野。より。ま。の。と。率。い。ま。たり。ま。の。ま。る。ま。
 ま。の。び。と。簡。雍。曰。く。君。あ。ま。ま。と。棄。む。ま。ま。禍。う。あ。ら。ず。遠
 う。ま。と。と。前。あ。る。山。い。ま。る。石。ど。と。尋。ね。ま。ま。一。人。ま。の。ま。と。曰
 く。前。の。當。陽。縣。山。の。名。と。景。山。と。曰。く。玄。徳。と。あ。ち。山。の。林。鹿。神
 と。取。の。人。と。曰。秋。の。末。と。涼。風。骨。と。徹。り。曰。ま。ま。と。昏。ま。ま。
 哭。号。声。野。と。あ。る。孫。夜。の。四。更。の。比。と。よ。ん。で。俄。と。西。北。の。方
 より。喊。の。声。地。と。動。く。来。る。ま。ま。玄。徳。驚。馬。ひ。て。の。ぞ。馬。と。打。棄
 二千余騎と引く。む。ひ。の。ま。曹。操。精。兵。と。駈。く。掩。殺。も。その

勢ひあつるべうらむ。玄徳命とて、攻戦ひまを危く入
 りる。忽ち鹿の軍馬一條の血路と切開ひく。玄徳を
 きくひ生と。あまきとあつち張飛あり。一手は兵とあひせ。東とま
 して、落ぬる南の方。二族の勢あり。長坂坡に殺到す。
 真先は進む。荆刀の大將文聘あり。玄徳まきとて君
 又北背の國と賣の賊大丈夫の所為。あつちと呼りぬ。文
 聘あつちとあつちと去りぬ。又後より許褚兵と強く追
 来る。張飛力と振とまきと拒ぎ。大敵と切散し。東とまき
 走りぬ。喊の声をうや遠あり。玄徳息とまきと
 走りぬ。ひるぐ。志と馬より下り。味方と人の百余騎と
 討あき。妻子老少。糜竺糜芳。趙雲簡雍と始とて。そ

の外の大將とて。行方志とあつちと玄徳も西とて。涙
 とあつち。右大勢の百姓と。まきと慕ぬ人。浩る大難とあつ
 ち。妻子從類も。一人もあつちとあつち。たつち土本とあつち
 くる人ありと。あつちとあつちとあつち。あつちとあつちとあつち
 前とあつち。趙雲とあつち。曹操とあつち。玄徳
 大とあつち。趙雲とあつち。故人あり。何んぞ敵と降とあつち
 張飛も亦曰く。味方の力益勢ひ迫りた。とて。曹操
 又降り。富貴と得んと。あつちとあつち。あつちとあつちとあつち
 よめ入と信とあつち。玄徳の曰く。趙雲忠難の中と相伴
 ひ志の堅り。金鉄のど。あつちとあつち。富貴とあつち。あつち

又とあらん麻葉芳が白く誠ひて趙雲が曹操が方へ行てと
 たり玄德の曰く趙雲定めて故あらん再びひよりの斬で
 まのべ張飛が曰く某が行く行て趙雲と尋ね事案本
 ぶ一鎗は刺殺さん玄德の曰く汝誤り疑ひありは
 関羽が顔良文醜と殺せしむる趙雲あらはれ
 棄れは彼去る任を相逼るるを趙雲あらはれ
 棄れといひる人ども張飛卒にまじりて二十騎ありは
 ちと長坂橋を行ひ且橋の東に木深き林ありまはれ
 突た竟の事よと喜んぐひよの計を思案し木の枝を切て
 二十人の騎する馬の尾を結付林の陰に住来し大勢ある
 体て見せ張飛のぞと見と曰く二十騎のころは五百余騎

當べりとて獨笑してた一人橋の上を馬で立矛とまはれ西と
 のぞんで待居り趙雲の夜の四更に曹操が大軍寄来大
 山の出卒がとくありは且命を棄て戦ひ大勢を破りて
 玄德とさかせむ卒よあつと殊よがのりし玄德の夫人老
 少とありあつて行方とまはれつらるる中よあつて君の
 眷属二十余人別して甘夫人糜夫人幼主阿斗三人あり今
 夜の合戦は行方と見失ひあんの百目ありて再び君を見入る
 ちし命令のあらんがだつて敵と戦ひ平生知遇の因に報せん
 ては三十騎ありたる兵とまはれ取て回して敵の村を
 たる真中を蒐入四方八面と射破り地廻りて尋ねるる
 の百姓よの号泣の声天を震ひ地を動も夫中り名を打

欠

MISSING

きたるやのども子親離き女男と棄て傷と蒙り血を帯
 く逃走るやの夜もあらず血あがまき溝のどく屍の積む兵の
 ぞ。趙雲馬を打て走りくるがたつらある草の中み倒れ伏し
 たるものあり。近よりてまきとてまきとてあち簡雍あり。まきと
 なまけ起しといふ夫人と見えぬまきとて問ひ簡雍が曰くいま
 まは敵の寄るやとて一同に逃たりしが夫人が車や棄れ阿斗
 と抱て走りぬり。まきとて山を越え馬を飛く。山の坡をまきとて敵
 将一人追駈一鎗は突落し馬を奪り引返せり。まきのかへ此
 の「と」といひまきとて趙雲馬よりまきのせす下の士卒を付て送
 らし。まきとて天より地入り。二夫人阿斗の行末をたね給
 ば「尋ね給へ」といふ。沙場は屍をまきとてまきとていひまきとて又長

坂坡まきとてみりまきとて一手の兵声とあびて。趙將軍に呼趙雲
 馬とてまきとてまきとて問ひまきとてまきとて車か推士卒ありし
 が夫瘡とてまきとて起りあちまきとて答趙雲が曰く夫人乃行
 末のまきとてまきとて曰く夫人の髪とてまきとて蹴足とて百姓と
 まきとて南とてまきとて走りぬり。趙雲とてまきとて馬を飛し。南と
 ひるひ馳れまきとて向ふまきとて百姓男女百人打混ひて逃走
 する。趙雲大音とてまきとての中み夫人の御に在まきとて呼なり。まきと
 夫人趙雲とてまきとて声とてまきとて泣く。趙雲馬より飛下鎗
 とて膠とてまきとてまきとて浩る難儀とてまきとてまきとて某とて罪と
 麻栗夫人阿斗のいふまきとて問ひ甘夫人の曰くまきとて麻栗夫人
 とてまきとて敵の追まきとて車とてまきとて百姓とて交り逃くるが。又一手の

新編 太平御記 卷之八 三十三

敵は黄蓋を遣はし糜夫人阿手とも一行方とあつた。たゞ
ひざり命で助り来きりと熟するものあり。百姓もさかた起る。
一手の敵又寄来る。趙雲馳ひてまきとて入る。真流を生取
て馬上に綁付たりのまきとて入る。生取の糜夫人あり。その跡に一
人の大将手も力とてあつた。千余騎の兵を率ひて入り。まきと
あつた曹仁が手下に厚手導との猛將あり。糜夫人を生取
て手柄とあつた。まきとて入り。趙雲鎗でひらひら突くる
うり。鎗も突死し。雜卒原と討散して。糜夫人を扶け敵の
馬を奪ぐ。甘夫人とのせ路とひらひら長坂坡に到り。まきと張飛
橋の上の馬と立とて矛を横へ。大音あびて曰く。趙雲あつと曹
操も降る。趙雲が曰く。まきとて入る。糜夫人と尋ねるとまきとあつた。

へく敵は降らん。張飛が曰く。きたる簡雍が来ひて。まきと知
せむ。まきと張飛の御辺と殺さる。趙雲が曰く。君は何に在
まきと張飛が曰く。前面のあり。遠くまで趙雲が曰く。糜夫人甘夫
人を守護し。まきと入る。糜夫人と入る。糜夫人阿手
の行末と見届んとて。討残さる。兵五六騎と刃具とて。又
敵に弛向ふ。まきと入る。大将も入る。手も長き鎗と持替
劍と負ぐ。十余騎とまきと入る。馬と躍る。まきと近付たり。趙雲
角の間谷まきと及ぶ。真地暗く討く。蒐りた。鎗も突く。落
る。まきと入る。遊卒とまきと入る。遊散する。まきと入る。大将の曹操も
。宝劍とあつた。夏侯恩とのまきとあり。元來曹操青銅の
天とて秘藏の宝劍二振あり。倚天の劍の常とての帯。青

會入通名三國志

三十一



趙雲



張郃

趙雲
幼主
守護
土坑
出る

を惜しむ身よめらむ。極つらむ將軍の子と扶て大守退き
うあざむきまぐらむ掛ひあまののろの聲の遠近ひびたれ
早く馬よ召よよとまむる麻衣夫人小兒と趙雲の手にお
しと曰くこの子の天命將軍あり。妻やらむ掛て西あがら候
ひあられ趙雲声であらけ。あまの早く乗めぬぞ敵ま
近付たりと叱りえ。麻衣夫人あんの谷もあて身よめらむと
わらむらむる。右井りしとびひて先ん人た。趙雲とまま
あく牆を引ちがつて井の中を填め又甲の繼を解て心當
殺し阿平を懐に入名とよぶとれ。應の人といふと。鎧を取
て馬に乗れ。早く敵の大將歩立の勢を引て。近々と取巻
たり。趙雲牆外に突出たらむ。曹洪が手下の日安明といふ大

將三尖兩刃の刀とまやく。真先を蒐りらる。趙雲たぐ一合突
死し馬と誼と通りらる。よと入る。やの一人もあまむ。乱る
又一手の兵旗と真先をまむ。喊と作て途が塞ぐ。趙雲ま
とらる。旗の河間の張郃と書たり。あまらる。猶豫とま
真地暗く討く蒐り千余合戦ひらる。あまらる。容易の敵あ
むとまむ。馬と引返して走りぬ。張郃勝ののり追ま
る。趙雲馬と飛しく。忽ち土坑に陥入らる。張郃得たりと上
す。鎧と取のて下突させんとまむ。忽然とく。坑の中す
紅の光にあびき。紫の霧とまむ。趙雲が乗たる馬一飛
出らる。張郃たの駈ま重く追まらる。まむ。懐に抱
見後天子とあまむ。洪福あるまむ。あり。趙雲不思議の

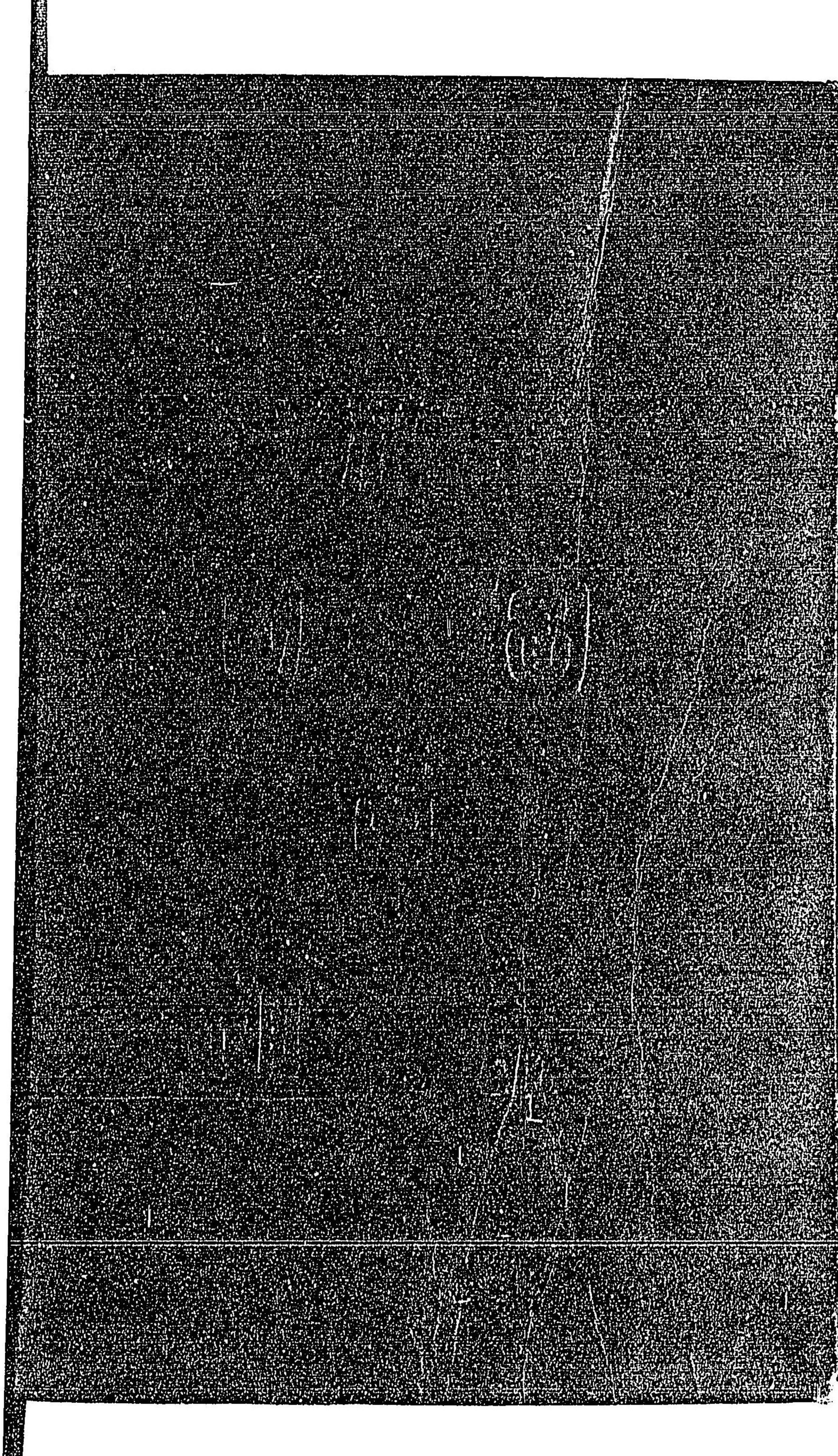
129
74

續本通俗三國志三編卷之八終

難あつと免まぬき馬うまと乘のりて走はしりて去いる。向むかひて二ふた手の勢せう討うて蕙けい
 り。後のちより二ふた手の勢せうを破やぶれり。作つくりて攻せめむる前まへあり。馬うま延の張ちやう
 顛きん後のちあり。焦せう觸じゆく張ちやう南なん。よも表えい紹せうす。降かう茶ちやしく。曹せう操そうと
 趙せう雲うん乱らん軍ぐんの中うちより相あひ戦たたかひ。青せい釵さいの
 劍けんとて討うち合あはれり。あつて盗たうの真ま甲けつより刃やいばを割わりてく。あつ
 へい肩かた先さきより腰こしと掛かけ。斃あせり。割わりてく。その鋒かみは當あたる。あつて
 命いのちと失うしなはれり。あつて半はん點てんは又またと損こはれり。真まの希まれ代の
 宝たから劍けんあり。

續本通俗三國志三編卷之八終

122
74
28



122
74
28

繪本通俗三國志

三編
八